自然と人の文化

多治見市文化財保護センターだより No.53　2019.3

企画展

太白焼展

―多治見市の出土品を中心に―

1/21(月)－6/28(金)

「太白焼」と呼ばれるやきものがあります。しかし、「太白焼」という言葉の定義は、はっきりしていません。では「太白焼」とは一体何なのでしょうか。

現在、「太白焼」というと一般的には、19 世紀頃に瀬戸・美濃地方で作られた、陶器や炻器（せっき）に染付を施したものを指しています。炻器とは、陶器よりも硬く焼き締まり、緻（ち）密な素地をしていますが、磁器よりは粗い素地をしているやきもののことです。

企画展「太白焼展 ―多治見市の出土品を中心に―」では、19 世紀前半から中頃にかけて多治見市で作られた「太白焼」を中心に、可児市や土岐市、瀬戸市など近隣の生産地から出土した「太白焼」もご紹介します。

陶器や炻器の、粒子が粗いボディの上に染付で模様を描くと、じわっと滲（にじ）んで柔らかい表情が生まれます。また、鉄などの不純物による素地の濁りのある色も、温かみがあって魅力的です。太白焼の素朴な美しさを、本展でどうぞお楽しみください。

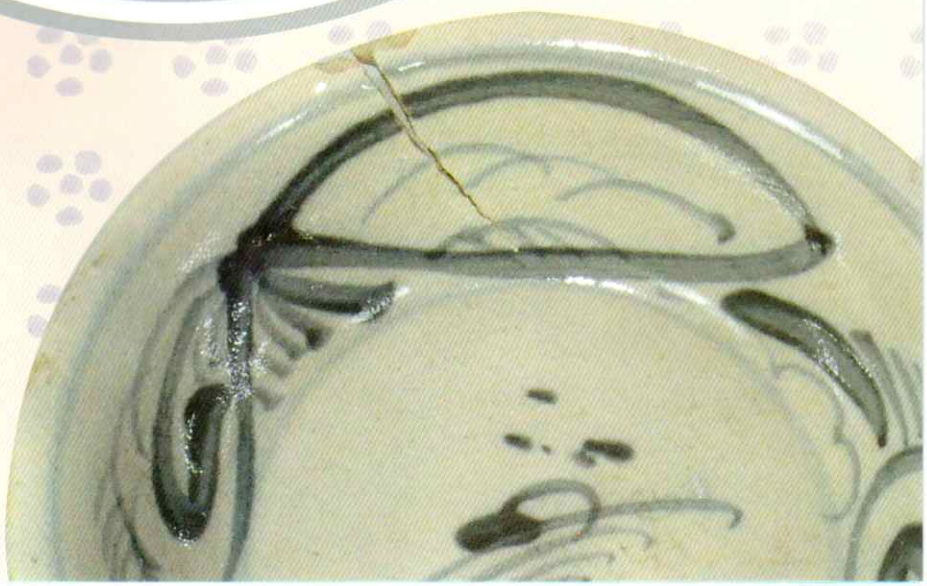
併せて、「染付」の技術で多治見市無形文化財保持者に認定されていた、故・青山禮三（れいぞう）による炻器染付の作品もご紹介します。

「太白焼展 ―多治見市の出土品を中心に―」

期間　平成 31 年 1 月 21 日（月）～6 月 28 日（金）

場所　多治見市文化財保護センター展示室

入場　無料



「白天目（しろてんもく）」が多治見市無形文化財に指定されました

技術保持者：青山双男（ふたお）（双溪（そうけい））氏　　指定日：平成30年9月25日

▲白天目（青山双溪氏 作）

天目茶碗は抹茶用容器で、中国浙江省北部の天目山で修行した留学僧たちが日本に持ち帰ったことが由来とされています。黒や茶褐色の鉄釉をかけたものが多く、すり鉢状の形で、口縁部のすっぽん口と呼ばれるくびれや低く小さな高台が特徴です。

日本では13世紀末に瀬戸窯で天目の生産が始まり、15世紀中頃には美濃窯でも焼かれるようになりました。その中に数は少ないものの灰釉や長石釉をかけた「白天目」をみることができます。

白天目は生産期間が短かったためか現存数が少なく、茶道黎明期の本格的な和物茶碗を考える上で不可欠の存在で、美濃窯の前代の技法と桃山陶とを繋ぐ貴重な技術です。

また、白色を呈する陶土の選択、透明性の高い灰釉の配合、紐輪積みロクロ水挽きによる素地の成形を行い、戦国期に瀬戸・美濃窯で焼かれた白天目の技法を再現した青山氏の功績は大変偉大なものです。

以上をふまえ、16世紀頃に瀬戸・美濃窯で焼かれていた「白天目」の制作技術を無形文化財に、青山双男氏を技術保持者に認定し、その技術の保存と普及啓発に努めていきます。

▲青山双男（双溪）氏

▲ロクロでの制作の様子

中学生が職場体験授業に来ました！

文化財保護センターでは、中学生の職場体験の受け入れを行なっています。今回は10月18日に小泉中学校の2年生3名が、一日かけて職場体験を行いました。

まずは文化財保護センターの仕事内容についての講義を行いました。展覧会や出張授業、文化財講座の開催など、文化財の普及啓発事業についての説明と、発掘作業や出土品の管理など、埋蔵文化財事業について紹介し、職員が普段どのような仕事をしているのか理解してもらいました。

つぎに、実際に昔の資料に触れてもらうため、土が付いた状態の出土品を洗う作業や、洗って乾燥した出土品を糊でつなぎ合わせる作業を体験してもらいました。出土品の収蔵庫も見学し、発掘された資料が保管されるまでの様子を一通り見てもらいました。

▲出土した資料の土を洗い流す作業を行いました

▲講演会場で講師の手伝いをしました

さらに普及啓発事業の体験として、ちょうどこの時期に陶磁器意匠研究所と共同で開催した展覧会、「文化財保護センター × 陶磁器意匠研究所連携企画 多治見のやきものvol.1 滝呂」の関連講座で、講師の補助と来場者の誘導などを手伝ってもらいました。

中学生に今回の感想を聞いたところ、出土品を実際に手にとって扱ったことが一番印象深かったとのことで、文化財についての理解を深めてもらえた一日となりました。

大藪のシダレザクラ保護事業

大藪のシダレザクラは大藪町の神明神社の境内にあります。推定樹齢は約160年で、昭和58年3月16日に多治見市の天然記念物に指定されました。指定された文化財の中で唯一のサクラです。

▲平成18年の様子

▲平成29年の様子

近年シダレザクラの樹勢が衰え、幹や太枝の腐朽が目立ってきました。そのため、今年度から3年かけて樹勢回復の保護事業を行うことになりました。

まず、根本の土壌の入れ替えを1/3ずつ行います。また、枯れ枝の剪定、腐朽部分の保護処置、表土の乾燥防止処置、殺虫・殺菌剤の散布などを行い、最後に支柱の取りつけと保護柵を設置します。

今年度は11月に剪定や幹の腐朽部分の処置などを実施しましたが、予想以上に腐朽部分が多いことが判明しました。今後これらの腐朽部分をどのように処置していくのかは、樹木医と施工業者、文化財所有者である神明神社と話し合いながら決めていく予定です。

▲エアースコップでの掘削

▲幹の腐朽部分に保護剤を塗布

▲剪定断面に保護剤を塗布

大沢遺跡発掘調査

場所：多治見市小泉町地内　　調査面積：約 70 ㎡
期間：平成 30 年 12 月 7 日～平成 30 年 12 月 17 日

大沢遺跡は、小泉町２丁目・３丁目・８丁目地内に広がる旧石器時代から中世にかけての散布地です。遺跡は、小泉駅より約 300m 南西の丘陵地にあり、丘陵は西から東に延びる舌状丘陵地で、東に向かい緩やかに傾斜しています。

▲出土した石鏃と剥片

▲出土した打製石斧

遺跡の範囲は、丘陵地の東西約 100m、南北約 30mにわたっており、標高は 130m前後となっています。一帯では、昭和 40 年代から畑地などで石器が採集されており、市内でも古くから知られた散布地です。

大沢遺跡では、これまで遺物の表面採取や試掘調査が行われており、旧石器とされる石器や縄文時代の石器のほか、主に古代から中世にかけての遺物が出土しています。しかしまとまった面積での本発掘調査は行われておらず、今回が初の発掘調査例となりました。調査は開発される約 70 ㎡を対象に行い、石鏃（せきぞく）・剥片・打製石斧といった縄文時代と考えられる石器が出土しました。

多治見市内において古くから知られた遺跡であったことから、特に古代における遺構などの発見が期待されましたが、古代の遺構と確実視出来るものはなく、成果としては僅（わず）かな石器類・土器類・中世陶の遺物を確認したのみでした。

林雲鳳（うんぽう）の作品展を開催しました！

平成30年10月に、笠原町出身のやまと絵画家・林雲鳳（1899～1989）の作品展を、文化財保護センター分室とヤマカまなびパークの2ヶ所で同時開催しました。

文化財保護センター分室（美濃焼卸団地内）では、10月7日・8日に催された「たじみ茶碗まつり」に伴い、分室展示「林雲鳳と昔の人形」を開催しました。会場では林雲鳳の絵画作品と土雛を中心に展示し、併せて体験イベントとして、こども陶器博物館と提携したクイズラリーを行いました。土雛やクイズラリーを楽しむ子どもたちの姿が多く見られ、2日間で約600人の来場者がありました。

またヤマカまなびパークでは10月5日～10月9日に、特別展「林雲鳳展」を開催しました。こちらの会場では、「豊臣秀吉」や「源氏物語」、「武者絵」など、林雲鳳のやまと絵と歴史画の大作を17点展示しました。

来場者からは両会場ともに、地元ゆかりの作家の作品をまとめて見られる良い機会だったとのお声をいただきました。

▲分室展示「林雲鳳と昔の人形」のようす

▲特別展「林雲鳳展」のようす

第 15 回喜多町西遺跡公園まつり

開催日時：平成 30 年 10 月 27 日（土）　午後 1 時 00 分～午後 3 時 30 分

多治見市史跡に指定されている喜多町西遺跡公園には古代の家屋や倉庫が復元されています。第 15 回となる公園まつりでは 12 名の幼児～小学生が参加し、古代の暮らしを体験しました。復元された竪穴住居の中で遺跡の説明を聞いた後、古代の装飾品・勾玉を作りました。また、舞錐（まいぎり）という木の道具で火をおこす体験や、獲物をとるための弓矢射的、貫頭衣といわれる大昔の衣装を着るコーナーもあり、楽しく古代の暮らしを体験することができました。

▲的を狙う姿が勇ましい！

▲昔の人はどんな暮らしをしていたのかな？！

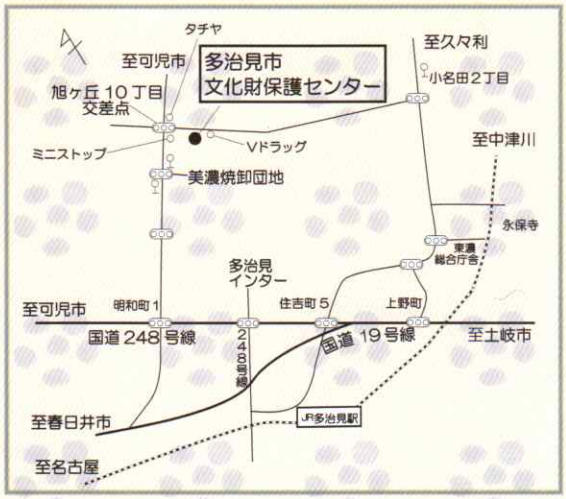
▲昔の火おこしは大変です！

多治見市文化財保護センター

〒507-0071　岐阜県多治見市旭ヶ丘 10-6-26
TEL(0572)25-8633　FAX(0572)24-5033
E-mail:hogo-cen@city.tajimi.lg.jp
ホームページ :http://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/

〈利用案内〉 開館時間：9:00 ～ 17:00
休館日：土・日・祝日、年末年始
入場：無料

〈交通案内〉 タクシー：多治見駅から約 20 分
バス：東鉄バス「美濃焼卸団地前」下車　徒歩 5 分



発行部数：1300 部（税抜 35,100 円）　この冊子は環境に配慮した紙・インクを使用しています。